

厚生労働科学研究委託費（長寿科学研究開発事業）

委託業務成果報告（業務項目）

業務項目名：

地域診断と見える化ツールを活用した介護予防施策マネジメント・パッケージの開発

d. 介護予防事業計画の立案までのマネジメント・プロセス開発

d-3. 東海市

愛知県東海市における健康交流の家事業の評価

担当責任者	尾島 俊之	浜松医科大学医学部健康社会医学講座 教授
研究協力者	伊藤美智予	日本福祉大学健康社会研究センター
研究協力者	宮國康弘	千葉大学予防医学センター
研究協力者	細川陸也	名古屋市立大学看護学部地域保健看護学
研究協力者	近藤克則	千葉大学予防医学センター
研究協力者	青木祥太	東海市高齢者支援課
研究協力者	阿部吉晋	東海市高齢者支援課
研究協力者	早川祐子	東海市健康推進課
研究協力者	柘植由美	東海市健康推進課
研究協力者	後藤文枝	東海市健康推進課

研究要旨

「健康交流の家」事業の効果を検証することがこの研究の目的である。東海市共同研究会において、データに基づく、また現地調査による東海市の地域診断等を実施してきた。2014年12月に、健康交流の家の評価等を目的として市内全域での調査を実施した。対象者は、健康交流の家の建設済み及び数年以内に建設が予定されている地域の住民、市内全域から無作為抽出した住民、また健康づくりやボランティア実施団体等の住民である。有効発送数2,397件、回収数1,682件で、回収率70.2%であった。また、前年度の2014年3月に健康交流の家の利用者等に調査を行った。健康交流の家の利用者また建設済み地域の住民の方が体操実施や趣味の会への参加をしている人が多く、転倒が少ない等の結果が得られた。今後、追跡調査を行い、より確実な評価を行っていきたい。

A. 研究目的

愛知県東海市では、自治会集会室と敬老の家の機能を合築した健康交流の家事業を推進している。東海市においてデータに基づき地域づくりによる介護予防対策を推進すること、その具体例として、健康交流の家事業の効果を検証することがこの研究の目的である。

B. 研究方法

2012年度から、東海市共同研究会が行われており、これまでに20回弱開催されている。参加者は、東海市健康推進課及び高齢者支援課職員、また日本福祉大学、千葉大学、浜松医科大学、名古屋市立大学等の研究者である。

この東海市共同研究会において、データに基づく、また現地調査による東海市の地域診断等を実施してきた。

2014年12月に、健康交流の家の評価等を目的とした東海市内全域での自記式郵送調査を実施した。対象者は、健康交流の家の建設済み及び数年以内に建設が予定されている地域の自治会の住民、市内全域から無作為抽出した住民、また健康づくり自主グループ、ボランティア実施団体等の65歳以上の住民である。

また、前年度の2014年3月に大池健康交流の家の利用団体代表者及び施設利用者を対象として調査を実施した。

(倫理面の配慮)

疫学研究に関する倫理指針に則り、浜松医科大学医の倫理委員会による倫理審査を受け、研究の趣旨等を文書により説明し、同意の得られた方から回答を返送いただいた。

C. 研究結果

(1) 東海市の概要

愛知県東海市は、名古屋市の南に隣接し、知多半島の根元にある、人口11万人、面積43平方キロの市である。

1969年(昭和44年)に知多郡上野町・横須賀町2町の合併により誕生した。江戸時代の儒学者である細井平洲の出身地である。また、カゴメの創業の地である。

産業は、鉄鋼とランのまちとして知られる。鉄鋼では、新日鉄住金名古屋製鉄所(1961年に東海製鐵として操業開始)、愛知製鋼本社、大同特殊鋼知多工場がある。洋ランの出荷量は愛知県内2位、またフキの出荷量は日本一である。

(2) 健康交流の家

健康交流の家は、2012年4月に上野台地区(富木島小学校区)、2013年4月に大池地区(加木屋南小学校区)に建設されており(図1及び図2)、2015年4月に千鳥地区(緑陽小学校区)に、また

その後、上野ヶ丘地区(名和小学校区)に建設予定である。

(3) 前年度の調査結果の概要

大池健康交流の家の利用者を対象とした前年度の調査は、団体代表者の回収率は $17/17 = 100\%$ であった。また、利用団体を通じての施設利用者への調査の回収率は $239/272 = 87.9\%$ であった。その他、団体に所属しないで施設を利用している者にも調査を行った。

健康交流の家の利用内容を図3に示す。体操・太極拳が最も多く、次いで「おしゃべり」であった。特にこの2者は健康交流の家ができる前と比較して大きく向上した。図表には示していないが健康交流の家ができた後では、従来の自治会集会場・敬老の家と比較して利用者数が1.6倍に増加し、利用頻度も約6割の利用者で増加していた。健康交流の家ができて、良い方向に変わった理由を図4に示す。「喫茶コーナーがある」、「部屋の雰囲気明るい」、「いつもボランティアがいる」、「いつでも利用できる」、「ボランティアがやさしい」等の回答が多かった。健康行動の変化を図5に示す。会話する機会や、生活が楽しく感じられる機会等について、増えた・やや増えたとの回答が過半数を占めた。健康状態の変化を図6に示す。健康交流の家を利用する前後で、健康状態が「良い方向に変わった」という回答が約50%みられた。

(4) 今年度の調査結果の概要

有効発送数 2,397 件、回収数 1,682 件で、回収率 70.2%であった。

地区と健康交流の家の利用頻度のクロス表を表1に示す。C、E、H地区において利用頻度の高い住民が多い結果であった。C地域は健康交流の家を自治会集会所と健康増進室の合築で建設済みであり、H地区は自治会集会所の隣に建設が行われている地域である。また、E地区はH地区の隣接地域である。

健康交流の家の利用頻度と主観的健康観のクロス表を表2に示す。「現在のあなたの健康状態はい

かがですか。」という設問の調査結果である。男女合計でみると、健康状態が「とてもよい」割合は、月1回以上健康交流の家を利用している人において最も高い。一方で、男性においては、年に数回利用する人において最も高い結果となった。地区と主観的健康観のクロス表を表3に示す。「とてもよい」割合は、健康交流の家のあるC地区で最も高い結果であった。

健康交流の家の利用頻度と趣味の会への参加頻度のクロス表を表4に示す。「あなたは下記のような会・グループにどのくらいの頻度で参加していますか。趣味関係のグループ」という設問の調査結果である。男女合計でみると、趣味の会に週1回以上参加している人の割合は、健康交流の家の利用頻度が高いほど高い関連がみられた。ただし、女性においては健康交流の家を年に数回利用している人で最も高い結果であった。地区と趣味の会への参加頻度のクロス表を表5に示す。男女合計、男性、女性のいずれにおいても健康交流の家のあるC地区およびH地区において他の地区よりも高い結果であった。

健康交流の家の利用頻度と友人等と会う頻度のクロス表を表6に示す。「友人・知人と会う頻度はどれくらいですか。」という設問の調査結果である。友人と週1回以上会う割合は、健康交流の家の利用頻度が高いほど高い結果であった。地区と友人等と会う頻度のクロス表を表7に示す。男性のH地区を除き、友人と週1回以上会う割合は、健康交流の家のあるC地区及びH地区で高い結果であった。

健康交流の家の利用頻度と友人等と食事をする頻度のクロス表を表8に示す。「友人や知人、仕事仲間など、家族以外と一緒に食事をする頻度はどのくらいですか。」という設問の調査結果である。男性の年に数回の人を除き、友人等と食事が週1回以上の割合は、健康交流の家の利用頻度が高いほど高い結果であった。地区と友人等と食事をする頻度のクロス表を表9に示す。健康交流の家のあるH地区においては男女合計、男性及び女性のいずれにおいても、またC地区においては男女合計

及び男性において、友人等と週1回以上食事をする割合が他の地区よりも高い結果であった。

健康交流の家の利用頻度とこの1年間の体操の実施状況のクロス表を表10に示す。「この1年間に次の趣味や活動を行いましたか。あてはまる番号すべてに をつけてください。」と聞いて、「体操」を選択した者の集計結果である。男性では年に数回利用している人で最も高かったが、男女合計及び女性においては健康交流の家の利用頻度が高いほど、体操をしている割合も高い結果であった。地区と体操の実施状況のクロス表を表11に示す。健康交流の家のあるH地区において、他の地区よりも体操を実施している割合が高い結果であった。

健康交流の家の利用頻度と過去1年間の転倒経験のクロス表を表12に示す。「過去1年間に転んだ経験がありますか。」という設問の調査結果である。男女合計、男性、女性のいずれにおいても、健康交流の家を利用していない人において、何度も転倒した経験のある割合が最も高い結果であった。地区と過去1年間の転倒経験のクロス表を表13に示す。男女合計、男性及び女性のいずれにおいても、健康交流の家のあるC地区及びH地区は他の地区よりも、何度も転倒した割合が低い結果であった。

D. 考察

健康交流の家の利用内容として、体操、太極拳との回答が最も多くみられた。また、健康交流の家を利用している人ほど体操をしている割合が高い結果であった。さらに、特に男性において、健康交流の家が建設済みのH地区において、他地域よりも体操をしている人が多い結果であった。体操をするために、健康交流の家を利用するとともに、健康交流の家があることで、体操が活発に行われるようになっていくことが示唆された。その他、趣味の会への参加頻度、友人等と会う頻度、友人等と食事をする頻度も、健康交流の家の利用者や、また健康交流の家の建設済みの地域において高い傾向がみられた。

健康交流の家の利用者において、また健康交流の家が建設済みの地域において、過去1年間に何度も転倒した割合が低い結果であった。また、健康交流の家の利用者や、健康交流の家の建設済みの地区において、主観的健康観も良い傾向であった。

健康交流の家によって、体操やその他の趣味の会への参加、友人等と会うこと等によって、転倒の予防等につながり、介護予防に貢献していることが示唆された。

ただし、健康状態が良い事で健康交流の家を利用している事も考えられる。また、これらの効果が最終的に本当に介護予防につながっているのかも確認する必要がある。今回の調査では、今後、健康交流の家を建設する予定となっている地域においても調査を行っているため、今後、追跡調査を行うことにより、因果の方向性や、また最終的な効果についても検討をしていきたい。

今回の調査で、健康交流の家の建設地域以外の住民でも、健康交流の家を利用している人が少なからず見られた。健康交流の家を活動場所としている趣味の会の参加者は、その近隣の住民であることが多いが、そうでない参加者も含まれており、健康交流の家は地域間の交流としても機能していることが考えられた。

今回の調査は、日常生活圏域ニーズ調査とほぼ同様の枠組みを使用しながら、東海市独自の取り組みである健康交流の家の利用状況等の設問を付加して実施したものである。このような調査は、各地域における介護予防の取り組みを評価するために有用であると考えられる。

E. 結論

男女や地区によって若干結果のばらつきがあるものの、健康交流の家の利用者の方が、また健康交流の家の建設済みの地域の住民の方が、体操の実施、趣味の会への参加、友人等と会う頻度、友人等と食事をする頻度等が高く、何度も転倒する割合が低く、主観的に健康である傾向がみられ、健康交流の家は介護予防にとって有用であることが示唆された。今後、より明確な結果を出すこと

ができるように追跡調査を行っていきたい。

F. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし